

マスターズを彩るレジェンドたち (20)

春の卯月。新学期が始まり、陸上もトラックシーズンがやってきた。だが、マスターズの皆さんは？ 羽を伸ばして走り、跳び、投げる季節なのにそれぞれの地域ではどうだろう。九州では九州マスターズ陸上競技選手権大会を9月4日に鹿児島市で開催するとか。各地域でもマスターズ陸上が行われれば、参加したいマスターズアスリートが集い、活性化につながるかもしれない。今月号は男子短距離の赤堀弘晃さん(兵庫)と、女子やり投の鈴木昌子さん(静岡)を紹介。

写真／赤堀弘晃さん、鈴木昌子さん

赤堀弘晃さん(49歳・兵庫)
50歳の今年、4年ぶりに世界大会へ

ついに「50歳代になりました。張り切ってM50クラスで頑張ります」と意気込む赤堀弘晃さん。今年6月に50歳になる赤堀さんは、2021年までM45クラスのスプリンターだった。47歳のときにM45・100mで11秒02を出した記録が、同クラスの日本記録になっている。

赤堀さんは2019年の全日本マスターズの第40回記念国際大会は出場しなかったが、同年6月30日に福岡・博多の森であった第103回日本選手権・マスターズ種目のM45・100mに出場し、11秒38でトップに。

赤堀さんがマスターズの仲間に入ったのは35歳になってから。全国デビューは2009年に愛知・瑞穂運動公園競技場で行われた第30回記念国際・全日本マスターズ選手権だ。37歳で出場したM35・100m 11秒31(−0.4)で4位、200m 22秒91(+1.4)の3位と、ほろ苦いデビュー戦となった。

翌年の第31回大会は陸上のメッカ、東京・国立競技場、赤堀さんはM35・100mで11秒30(+1.2)の2位と順位を上げ、200mは23秒18(−1.3)で見事に優勝した。その後、2014年9月に岩手・北上市であった第18回アジア大会を兼ねた第35回全日本マスターズ大会では、M40・100mに11秒11(+2.7)でタイトルを取った。この年、42歳。

赤堀さんは兵庫県加古川市の出身。同市の加古川南高では陸上で成績を残し、走幅跳では同県の高校でトップクラスに。元五輪4×100mRでメダリストの朝原宣治さん(当時・夢野台高)と同学年で、走幅跳で競い合っていた。

インターハイの予選を兼ねた同県の高校総体では7m52を跳び、朝原さんを抑えて1位となったが、青葉城下の宮城・宮城野で行われたインターハイでは、朝原さんが7m61で1位。赤堀さんは7m57の2位と、県大会の雪辱を許してしまった。

現在も2人はマスターズの大会で仲よく顔を合わす。赤堀さんは2021年10月、49歳で出た加古川陸協の100mレースで「11秒03で走りましたよ」と明るい声で話した。49歳としては立派なタイム。37歳でマークした11

秒02の日本記録と比べ遜色ない。

今年は再び4月30日に同市の競技場である加古川記録会に出る予定。49歳としての100mで、どのような記録を出すだろうか。今までかなり大会には出ているが「あまり印象に残っているレースはありません」と言う。日大に進学したが「練習のやりすぎもあって、故障続き。いい成績は残せなかった」と振り返る。

世界マスターズ大会にも40歳代で参加したが、同クラスの世界はケタはずれに強い。例えばM40・100mの世界記録は10秒台どころか、9秒93(2022年現在)だ。2015年のフランス・リヨン大会に出て、M40・100m 11秒54(−2.8)でぎりぎり入賞の8位だった。

「それでは」と翌年、オーストラリア・パース大会では11秒06(+3.4)とタイムを上げて5位だった。クラスでは不利な44歳としては健闘した。今年の2022年は6月にフィンランドで行われる世界マスターズ大会に「4年ぶりに出てみます」と、既にエントリーを済ませている。

マスターズ陸上を始めて、気を付けるようになったことは、「無理な練習は故障につながりやすい。体調を考え練習計画をきちんと立てて練習をすること」である。赤堀さんは「自分だけの練習でなく、マスターズ陸上をやりたい人と一緒に」と周囲に呼び掛け、クラブを立ち上げた。

それがBORY TC。練習は週3回



高校時代からのライバルである朝原宣治さんとは、今でも仲が良いという赤堀さん(写真)

程度。クラブの皆さんは男女15人前後だが「これからもっと増えてほしい」と赤堀さん。さらにこう付け加えた。「マスターズ陸上はやりがいがあります。2022年は50歳。M50クラスの集大成という思いで、充実したマスターズ陸上を楽しみたい」

**鈴木昌子さん(76歳・静岡)
72歳のときに29m03の
W70・やり投世界新**

2022年3月上旬に76歳になった女性で、やり投のレジェンド、鈴木昌子さんだ。静岡県浜松市に住んでいる。2019年の第40回記念国際・全日本マスターズ大会のW70・やり投では26m03と、2位に7m程の差をつけて記念大会を制した。

この1年前の2018年10月、奈良市で行われた2018国際ゴールドマスターズ奈良大会では29m03の世界新となるスローイングをみせた。72歳での快挙だった。それまでの世界記録27m95を更新したことで、女子優秀選手賞に選ばれた。

鈴木さんは60歳のときに第19回全国スポレク祭マスターズ陸上のW60クラスのやり投に参加した後、2006年全日本マスターズ陸上投てき大会に出場して、28m03でW60クラスの2位につけた。2009年に63歳で名古屋市での第30回記念国際全日本マスターズ大会に出て、30m14で圧勝した。

同大会の約1カ月後の全国スポレク祭マスターズ陸上でも30m87で1位。また、夏場にあった2009年国際マスターズ陸上投てき大会でも30m02でトップ。さらに初秋の9月、京都市で行われた国際ゴールドマスターズ選手権においても30m46で1位の座に。

2010年は鈴木さんの年齢が64歳となり、W60クラスでは不利な年となったが、東京・国立で開催された第31回全日本マスターズ大会のW60・やり投に31m67で優勝を遂げた。全国スポレク祭でも32m72で1位とな

り、国際マスターズ陸上投てき大会では33m48と記録を伸ばして1位となっている。

この記録を上回る34m64を東海マスターズ選手権でマーク、W60クラスの日本記録として登録された。この時点でW70までのやりの重さは0.5kgだ。W65クラスになり、2011年に和歌山市であった第32回全日本マスターズ大会で33m94を投げ、65歳で日本記録を更新した。

鈴木さんは秋田県の生まれ。湯沢北高時代にインターハイに出たが予選どまり。「その頃の記録は27m台だったでしょうか」。1963(昭和38)年に日体大へ進学。関東学生対校では3年生のときに41m11で当時入賞の6位に。次年には42m04と上げ4位へ。

同年の1966年にはインカレでも41m40で6位に食い込んだ。学生時代の後半は「オールラウンドの体づくり」とばかりに、当時の五種競技に取り組んでいた。そういったこともあって、マスターズの仲間入りをしてから、W70クラスの71歳のときに、2017年の国際・第38回全日本マスターズ大会では砲丸投にも出て、6m44を突き出して2位に。

この記録は同年のランク3位となった。やり投の成績はともかく、この年に愛知マスターズで鈴木さんは27m79のW70クラスの日本記録を樹立した。先に触れた奈良市での29m03の世界記録だ。記録を出したときの気持ちを鈴木さんはこう語った。

「ピットに立ったとき、天気はいいし、気持ちいいなあ。競技場の周りの自然もよかったし、このように恵まれた環境で競技ができるなんて、何と幸せなんだろう」と思いながら投げた。「記録を出そうとか、そんな思いは全くありませんでした。自然体で投げたのがよかったのでしょう」と付け加えた。

世界記録を誕生させるのには「リラックスして、自然体でいることが大切



記録を狙っていなかったという2018国際ゴールドマスターズ奈良大会では、W70・やり投で29m03の世界記録を打ち立てた鈴木さん

だ」ということを教えてくれる言葉である。鈴木さんは大学を出た後、小・中学校の教諭をし、校長も務めた。指導主事もし、若い人たちの指導にも当たっている。

「マスターズ陸上の楽しさは若いときの陸上とはまた別。W75クラスになって、また頑張ります」と話す鈴木さん。最近うれしかったことは、2021年にJSC(日本スポーツ協会)から受賞した『日本グランプリ賞』の表彰だ。「今までの努力が認められたのでしょうか。感謝の一言に尽きます」と喜びをかみ締めた。

**全日本マスターズ
今年も中止が決定**

2022年9月23日から3日間、福井県の9.98スタジアムで開催される予定だった全日本マスターズ陸上競技選手権大会は中止となった。マスターズ連合が3月17日に理事会を開き、決定した。